

第52回国立大学図書館協会総会ワークショップC議事要旨

日 時：平成 17 年 6 月 30 日（木）13:30～15:30

テーマ：NACSIS-CAT/ILL の課題解決に向けて

司会（東京大学附属図書館事務部長 笹川郁夫）

ワークショップのCのテーマは、「NACSIS-CAT/ILL の課題解決に向けて」です。課題解決のためのプロジェクトが設置され、私もこの課題検討プロジェクトのコーディネーターを仰せつかっております。その関係から、まず私から大学図書館という立場に立ってのご説明をし、その後、国立情報学研究所（以下、NII という。）開発・事業部コンテンツ課課長補佐の茂出木さんに、NII の立場からという形でご説明いただく。その後フロアから活発な意見を頂きたいと考えております。

発表1：東京大学附属図書館事務部長 笹川郁夫

まず背景をおさらいしますと、先行した 1985 年の学術雑誌総合目録システム、次にできた総合目録システム、次いで ILL が完成し 1992 年から稼動し、先行する二つのシステムを ILL に生かすのだという形で、日本の書誌ユーティリティが出来上がった。図書館業務およびデータの広域分散と集中を考慮した共同分担目録システムとして各大学図書館が NII に参加してきた。その後、多言語化、ISO プロトコルによる OCLC とのリンク等を実現し、現在 NACSIS-CAT/ILL の参画機関数のうち、大学図書館はもう 1000 機関を超えています。目録データは約 750 万件にも膨れ上がっております。大学図書館の業務システムをサポートすると同時に、我が国の学術情報流通基盤としてのサービスシステムとして成長してきた。

この学術情報システムというものをこれまで展開してきたわけですが、いろいろな課題が今、出てきました。まさに日本の書誌ユーティリティの全体の顕在化というのですか、大学図書館界として私は危機であろうと思います。現在、NII との業務連絡会の中で課題検討プロジェクトが動いているわけですが、科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会の中間報告でも議論されているという状況です。

国立大学図書館協会としましては、この春、品質管理等の課題について9地区において議論していただくように事務局のほうから投げかけ、私のほうで全国のさまざまな意見をまとめてみました。「背景」「意見」「問題の原因」「改善・解決に向けて」というカテゴリーで分類をして分けてみました。

一つには、ILL のサービスステータスの運用に関してですが、オン・オフを頻繁に切り替え、受付を制限している図書館が存在していることが分かりました。このことを容認しますと国大図協で決めている「図書館間における相互利用要項」の趣旨にゆれを来たすことになる。各地区からの意見をまとめてみますと、本来の趣旨からも望ましいことではないが、現実には一律に規制することで ILL 全体が落ち込むことも考慮すべきである、また、キャンセルケースの分析と原因調査をしたらどうだという意見も頂きました。問題の原因は業務量と人的資源のバランスである。図書館長ならびに部課長が現場等を見た分析が必

要であろうと思います。それから相互協力の趣旨の不徹底があった。改善をしていくには、館としてレンディングポリシーを再度確立する必要があるだろう。

次には ILL 料金の設定問題です。ILL の受付を行わない図書館に関して、特定の料金の設定を行うかどうかということです。意見には賛否あり、ペナルティが必要との意見もあります。各館のポリシーで検討すべきであろう。

三つ目の問題ですが、雑誌所蔵データの更新問題です。雑誌のデータ更新が完全に行われないことによる ILL サービスの支障が問題になっている。学術雑誌総合目録の冊子を出していたときには、このデータ更新はスムーズに行われていましたが、冊子を中止してから、データ更新が行われなくなってきた。大学図書館としてはローカルシステムの仕様にきちんとアップロードシステムを盛り込むことは最低限必要ではないか。このアップロードシステムさえでき上がっていない図書館がある。NII に対しては、やはり年に 1 回の所蔵更新のキャンペーンをやってもらおうと。また、自動アップロードシステムに関して、いろいろなサポートをしていただくということもあるのではないかとも思っているわけです。

四つ目の問題が書誌の重複レコードの方式です。重複がかなり多い。目録担当者の削減、いわゆる非常勤職員に移行したり、あるいは経験不足があったり、アウトソーシングが要因とされているだろうと思います。改善・解決に向けて大学図書館と NII の共同でもって方策を探らなければならない。NII が今やっている目録講習会は、各地区の講習会も含めてシステムの使い方だけでなく、目録法を少し踏み込んだ形でタイアップして研修を立てていかなければ、この品質問題の解決には至らないと考えられます。

五つ目の問題ですが、CAT への入力を外注している。これは非常に増えております。改めて業者にも目録のシステムと目録法に関して研修を受ける機会を作るべきであろう。

六つ目の課題ですが、CAT への入力精度を上げるために、職員の世代交代の中で、目録法の知識が不足がちになってきている点について、改めて人材育成・人事制度の観点も含めて、慎重な議論が必要なのですが、認定制度というものは考えられないのだろうか。

さまざまな解決方法を今、お話ししたわけですが、改めて NII が持っております日本の書誌ユーティリティに参加する役割と責任ということ、改めてやはり考えるべきである。これは図書館経営全般にわたっても再検討という事項になる。一つは「資源共有理念の喪失」。やはり新たなビジョン、ミッションの構築をやらなければならない。それから、「館としての意思決定」。改めてレンディングポリシーというものを館として作っていかなければならない。もう一つは、大学図書館システムを作るときに、NII とやはり多目的の共用データベースを作るのだという意識がやはり必要である。そうして、「図書館業務システムとの調和」を図る。データベースの品質管理の責任という問題が残るわけですが、それは NII とこれから検討していく講習会の充実・強化ということですが、修了者が責任を持つのだという、今の規則ですが、この辺をどうするか。

ここに、書誌ユーティリティ課題検討プロジェクトの中間報告がございます。五つの活動、訪問調査、数値的分析、それぞれ行いました。その結果、応急策の検討の提案がなされました。提案は、相互利用の趣旨を理解せずに CAT/ILL の運用を行っている館には、その趣旨を改めて周知徹底してはどうだろう、意図的に趣旨に反する運用を行っている図書館には何らかの警告を与える。それから、館としての ILL レンディングポリシーを確立する。次には、外注のための仕様モデルについて、NII が各図書館の外注仕様を収集し、仕様

モデルを提示する。三つ目は、やはり研修の強化だと思います。資格認定制度を作るかどうかは別にしても研修を大学図書館とタイアップして、充実・強化をしなければならない。本協会には人材委員会がございます。四つ目は書誌レコードの調整方式の改善。重複書誌を解決するための新しい方式の検討を行うことが必要かと思います。五つ目は、雑誌所蔵データの未更新。強制力の問題があるかと思います。やはり事実をきちんと世の中に公表するというのも一つの抑制になる。雑誌の継続記号の運用方式についても再検討する必要があるだろう。さらに六つ目ですが、評価のための基礎的数値の開示が要るだろう。まさに CAT/ILL の業務分析表は今後も継続して、提供する体制を整備しなければならないと思います。管理職が実態を把握できるようにすることが大事であり、応急策の検討としてはこの六つが提案されています。

ということで、ゆれがひどくならないうちに先手を打って日本としての最大の CJK データベースを維持していければと思っている次第でございます。では続いて、茂出木補佐のほうからご説明をお願いします。

発表 2：国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課課長補佐 茂出木理子

国立情報学研究所コンテンツ課の茂出木でございます。昨年度、この場で、NACSIS-CAT/ILL は表面的にはうまくいっていますという評価はもちろんあるのですが、ただ、かなり妙な状態になっているということをお話しました。それを受けて昨年度、国公私立大学図書館協力委員会と NII との下に、この書誌ユーティリティ、NACSIS-CAT の課題に関する検討プロジェクトが発足したことは、笹川部長のお話にあったとおりです。

私からは、この 1 年間、その課題検討プロジェクトをはじめ、再度、現場の方々ともお話をし、現在どうなっているかということについて再度お話をさせていただき、最終的には、今後どうしていけばいいのかということについて申し上げたいと思います。

先ほどの笹川部長のお話にもございましたように NACSIS-CAT/ILL の原点に戻りますと、やはり 1970 年代の「資源共有」というキーワードからかと思います。私の今回の発表の参考資料は、当研究所の宮澤彰先生が書かれた『図書館ネットワーク - 書誌ユーティリティの世界 - 』という本がございまして、この本の中にも NACSIS-CAT のスタートに当たっている裏話も含めて書かれていましたが、NACSIS-CAT/ILL という日本独自の書誌ユーティリティが必要であるという方向性が出たのは、トップダウンではなく、やはり図書館現場からの熱意と努力だったということがいえることかと思います。これをしつこく言っているのは、昨年度から全国の現場の方とお話をしてちょっと驚いたのは、NACSIS-CAT/ILL というのは、NII のほうから押しつけられてやっているという印象を持たれている方もいる。共同構築や共同利用という精神から少し外れてきているように感じることが多かったからです。

一方、では書誌ユーティリティの品質低下は一体何が困るのかという端的なご質問も、受けるわけなのですが、NACSIS-CAT/ILL というのは、各図書館の業務システムをサポートする、共同目録というデータベースとローカルデータベースをシームレスにつなぐことによって、各図書館業務システムをサポートする。それとともに、やはり全国区で、この学術情報流通基盤を支えるものである、この二面性があるかと思っています。品質低下と

というのは、1点ずつを取り上げると非常に細かいことです。先ほど出たとおり、現在、NACSIS-CATには書誌データ750万件、所蔵データが8000万近く入ってしまっていて、量の面ではかなり満足のいく結果という判断ができるかと思えます。しかしながら、やはりエンドユーザに対する信頼性に関しては、データベースとしての質の面から、憂慮することがあるのではないかと思います。それから2点目は、費用対効果で、特に経営的な観点から必要になってくることかと思うのですが、重複書誌レコードという問題は、作る手間も無駄だったし、調整にかかる手間もけっこうかかっているということです。

書誌ユーティリティ課題検討プロジェクトが昨年度、行ったことに関して言うと、まず客観的に状況を把握することからのスタートでしたので、統計分析ということで今年の2月に、NIIのほうから各大学図書館に対して、業務分析指標というものを送りました。それからもう一つは表面上の統計数字に表れない、なぜこういう事態、数字になるかということについて訪問調査をいたしました。国公私合わせて15大学ほどに実際に伺いました。そのほかにも電話などで少しお話も伺ったことがございます。

その状況を中間報告という形でまとめたものを、国大図協の事務局のほうから、各館のほうにはすでにお配りいただいているかと思います。

まずILLの謝絶についてですが、これは何パーセントならいいとか悪いかではなくて、全体としてこれだけの謝絶が起こっているということに対してどうするかということでスタートしたわけです。

それから雑誌の未更新率についても、昨年、ちょうど1年前の今日になるかと思えますが、国立大学で10万件以上の所蔵データが更新されていないことをワークショップで申し上げたところ、10月ぐらいには、これがあつという間に減ってしまっていて、半分ぐらいになりました。トリガーというか、きっかけがもしかして必要なのかもしれないと感じました。

3番目のテーマとして図書の重複書誌が多いという件です。昨年度は、1年間に削除した3万5000件の書誌を作るのに一体幾らかかるのかということも申し上げました。恐らく書誌作成には平均単価700~800円かかるものなので、そういう業務の無駄も今後は厳しく見なければいけないのではないかと思います。

CAT/ILLシステムの根本にあるのは比較的善意の仲間のあいだで、うまくやっていきましょうというようなところであると申し上げました。実際、サービスの利用規則では、比較的緩やかなことしか言っていないのです。目録システム、ILLシステムの両方を利用してください。ILLシステムに関して、依頼と受付は両方やってください。講習会の受講に関しても、目録担当に対しては、きちんと講習会を受けた人が責任を持ってデータ登録をしてくださいということです。現状としてどうかというと、確かに目録所在登録を行わず、書誌レコードの検索あるいはダウンロードだけを行っていると思われる機関があります。極端に検索ばかりで、ほとんど所蔵登録がない参加館がログ等の解析により見えてきました。

昨年度の訪問調査で、明らかにここ数年、所蔵登録の率が低いところには、実際に伺ってお話を聞いたのですが、非常にショックを受けたのは、NIIのCATという総合目録に対して、ダウンロード用のファイルだという意識を明確に持たれていたのです。一方CAT業務を行わずにILLだけやっている。それから、その逆。これも事実としてあります。これが各館ポリシーだから許してくれと言われても、今の枠組みからいくとNGなのです。

それから昨年来、ILL 業務のサービスステータス切り替えというのは、非常に反応が過激な部分もございましたが、数字的に NACSIS-ILL サービスの現状を申し上げますと、平成 16 年度、国立大学全体で、ILL の謝絶、キャンセルが起こったのは 12 万 3000 件ぐらいです。NACSIS-ILL 全体では、エンドユーザから上がってきたリクエストに対して、参加館のどこかで答えられた割合は 95% 近くっておりますので、総体からいけば、図書館協力が非常にうまくいっている。20 年前に比べれば図書館サービスは良くなっている、いい感じだと言えると思っています。ただ一方、国立大学という機関で、謝絶がやはりけっこう多いということに関しては、一つの課題として受け止めなければいけないのではないかと思います。

謝絶レコード 12 万 3000 件の謝絶理由の分析はできる限りやってみました。その結果の大筋を申し上げますと、やはり研究室所蔵という理由が 30% あります。研究室所蔵とも絡むのですが、意外と欠号、未所蔵、所在不明という理由が多かったのです。これは総合目録にありながら、実際の現物とはきちんと合っていなかったというケース。それから、依頼側の確認不足というような二方向があります。

もう一方、昨年来、目のかたきのように言われていたサービスステータス切り替え問題ですが、システムとしてサービスステータスというフラグがある以上、オン・オフをすること自体が悪いとか悪くないとかいうことではなく、使い方の問題かと思っています。オフになって自動キャンセルされているというのが年間 4000 回以上、国立大学の中で発生しています。個別の事情がいろいろあるとは思いますが、全体のサービス運用の観点からどうするかということは常に考えていただかないと困るという気はいたしております。「うちが今大変」という議論で全参加館が進んでいくと、そもそも ILL サービスというものは成り立たなくなってしまう。成り立たなくなっただれが困るのだということになると、やはり最終的に利用者サービスに直結するのだと思います。

それから雑誌所蔵問題。NACSIS-CAT の最も世界に誇る特長の一つは、雑誌の所蔵データについて、きちんと巻号レベルまで頑張って保持してきたということに尽きるかと思っています。これは、共同構築・共同利用という精神で、データの書き方のお約束というのをまず守ってきたわけです。現状として、国立大学全体の所蔵データのうちの 41 万件が「+」つきのものでした。その 20% が「19 年+」という状況のままで、その半分以上、半分前後が確信的にやっていらっしゃる。全体として総合目録というのは、一定のルールやお約束で成り立つものではないかということと、本当にエンドユーザ、ILL 担当者にとって困らない、最新状況を反映した、信頼性の高いデータであるのかということがポイントかと思っています。

現在、重複書誌問題に見られる例としては、全く同一の書誌内容という重複が見られます。これは本当に検索技法の欠如なのか、操作ミスなのか、あるいは確信犯なのかということがありますが、恐らく単純なレベルの話ではないかと推測されます。

図書館員の仕事の能率も大事なのですが、やはり原点に立ち返りますと、書誌共有型で目指そうとした利用者の利便性を大学図書館全体としてどう考えるか。やはり学術情報システムといいですか、情報基盤整備、大学図書館連携と申しますか、今でも大事なキーワードの基盤としての NACSIS-CAT が少し危ない状態になっていることについての認識をしていただきたいと思っています。システムが、植物でいうところの何となく根ぐされしてき

ているというものに対する危機感があります。図書館員の専門性とその一種の熱意というか理念に向けて共同で頑張ろうというようなところで成り立ってきた部分が多いので、もし、今後無理だということであるならば、共同構築や利用方針について根本的に考え直さなければいけないのではないかとこの部分があると思います。CAT/ILL というのは全国でやっている仕事として、やはり大事なのだということについて、再度、いろいろご意見を頂ければと思っております。ということで、私からの発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会(笹川): ありがとうございます。ここで、今までの説明にない、さらにこうすべきではないかという意見がありましたら、ぜひともフロアから頂きたいと考えております。この問題について当面どうしたらいいだろうということ、このワークショップで方向づけができればと思いますが、ご意見いかがでしょうか。

藤原(東京工業大学附属図書館長): 私はこの4月から図書館長になりまして、とんちんかなことを申し上げる可能性が十分あるので、多少恐れてはいるのですが、私自身は情報を専門にしております。この話を初めて知ったわけなのですが、やはり、このデータベースは、日本の宝です。日本の誇るべきものとして何とか有効にしていかなければいけない。伺っている問題は、ソフトウェアの改善でできるところがあるのではないかと。重複の話も、ソフトウェアのほうのシンタックスチェックをうまく入れていくことで、ある程度はできるのではないかと。それから、このシステム自体が分散的に増殖していくようなシステムのように感じますので、全体をスーパーバイズするような機能も、現場のほうのデータ入力のチェックの機能も相まって、チェックがかけられる仕掛けができないかなと、お聞きした範囲ではそういう感想を持ちました。

早瀬(名古屋大学附属図書館事務部長): 今日の話は、理念をもう1回見直そうということが底流にあったと思うのですが、CAT/ILL は、それ以外に、図書館業務の効率化・省力化に非常に役に立っている。この面はもっと追求していく必要があり、まだまだシステム化という点では、効率化していかないといけない。図書館システムの中に、どういうリクワイアメントを入れていくかということ、全国的なレベルで考えていく必要がある。

北村(長崎大学図書館部長): 2点ほど感じました。1点は、システムは、今後検討すべき余地はかなりある。機械的に対応できるものは、各メーカーに要求するというような形で対応すべきである。また、茂出木さんから ILL の謝絶の理由で、研究室所蔵がありましたが、個々の所蔵レベルでサービス可否の判断ができるよう NII のシステムを変えていく必要があるのではないかと。あともう1点は、従来からこういう ILL、CAT の検討が、NII 対国・公・私立ごとの大学という構図で進められていますが、NII のシステムを使う側の問題がやはり非常に重要になっており、ユーザ間独自の検討の場としてユーザ会のような組織も必要ではないかと。

早瀬: 議論の方向性としては、笹川部長の先ほどの中間報告にある応急策の提案の1~6を進めていくという大体の方向性は出ており、そういう方向づけでいいのではないかと。思うのですが、5番の「雑誌所蔵更新への強制力」の表現は例えば「雑誌所蔵更新の徹底」

などに変えたほうが誤解されないのではないか。

逸村（文部科学省学術調査官）：意見ではなくコメントです。昨年この席でお願いしました、研究者として情報専門職における質問紙調査を昨年の7月に、全国公私立大学図書館約700に行いました。回答者の7～8割は、「目録分類は図書館員の基本的な技術」としていました。また、自由記入の欄で、特に管理職の方々が書かれています。今後はアウトソーシングの進行で、専任の図書館職員は目録分類についての知識の必要度が下がるだろうという方と、逆に、だからこそ図書館職員は目録分類、さらにはメタデータについての知識を一層高めておかななくてはならない、という両様の意見が出されています。ぜひ皆様、管理職、所管長の立場でお考えだと思いますので、ご検討ください。

文科省の話に戻りますが、午前中の松川課長の報告にもありましたように、現在、審議が進んでおります学術情報基盤作業部会において、このNACSIS-CATおよびNACSIS-ILLのシステムの在り方に関して、かなり深刻に受け止めています。ごく簡単に言うと、国民に対して説明責任が発生するということですので、ぜひ実りある結果を期待しております。

司会（笹川）

冒頭に藤原先生がおっしゃった日本としてのデータベース、宝を維持するにはどうしたらいいかという点では、今日皆さんから出た意見、加えて、私が先ほど提案を出しました、プロジェクトとして出した応急策、当面こんなことで改善を図ったらどうでしょうか。例えば、CAT/ILLの運用ガイドラインをきちんと作っていき、それから外注の仕様モデルを提示しよう。それから研修の強化、これはNIIのこれまでの研修にプラスして、目録法なども盛り込んだ新たな研修企画を立てていく。あるいは外注業者の資格認定をどんどんやっていく。我々はアウトソーシングするときに、遡及入力経費を取ったといったときに、業者選定するときに認定証が一つの目安になって、スペシャリストに外注が可能だという道筋を作る。

あるいはレコードの調整では、新しい方式を作っていく。雑誌の所蔵更新では、コメントがありましたが、強制力ではなしに徹底していく、あるいはキャンペーンを張って、秋なら秋に、みんなで入れようということやっていく。

それから、NACSIS-CATのデータベースは、ただで使えるものではないのだということで、評価のための基礎的な数値の開示も必要であろう。それでフィードバックして、自分の館の点検・評価にも使えるということが必要だろうということで、今までの意見プラス、この六つの項目を足して、このような形でとりあえず応急策を検討していこうということ、このフロアで決議したという形を持ちたいと思いますが、皆さん、いかがでしょうか（拍手）。ありがとうございます。